川漁にかかわる職人技術の記録とそこにみる川・地域・人の関係再構築による地域活性化の可能性に関する調査研究

～四万十川を事例に～

新川　達郎・菊池　静香

概要

日本では、産業構造の変化、都市化の進行、河川改修による環境の変化などにより、川漁、伝統工芸など川の恵みを活用した生業の継続が困難になり、これらに従事する人々も減少し、後継者不足などの課題を抱え、人的・技術的継承が困難な状況にある。個人が有する経験、知恵、伝統技術などは、先人から何代も受け継がれた歴史の蓄積である。しかし、これらは公文書や資料として保存されることが少なく、そのため、貴重な知的資源の損失になっている。

本調査研究では、川にかかわる“生業”に焦点をあて、職人技術者への調査を通して、忘れ去られようとしている技術や文化、歴史の記録保存を試みることとした。それによって、最も適切な記録保存の方法を検証し、そうした知的資源を川・地域・人のつながりの再構築に結び付け、さらにそれらを活用した地域活性化の方策について、考察することを目指した。

具体的には、いくつかの事例を取り上げて、考察を行うこととした。そのなかでも川漁については、いまだに細々とであるかもしれないが生業とされているところがある。河川固有の伝統漁法を守りながら地域で活動しており、本調査を実施するにあたり適切な対象であると判断した。そのため全国の川漁の現状について資料確認し、その中から、生業としての川漁の技術伝承が可能と思われる河川を選定し調査を進めることにした。具体的には次の３河川を対象に事例調査を実施することにした。

① 四万十川（高知県）
② 球磨川（熊本県）
③ 多摩川（東京都）

調査方法としては文献調査のほか、ヒアリング調査を実施した。川漁師、郷土史研究家などを対象に、各河川２～３名から活動の内容、川漁の現状、河川の状況、環境の変化、問題点・課題、川に対する哲学・思想などについて聞き取りを行った。これらを通して、①伝統漁法の技術習得に至る要素、②川漁を軸とした新たな取り組みの要素について検証した。

なお、本稿では、紙幅の関係上、四万十川の調査結果を報告することとし、他の事例調査とその比較研究の結果については、別稿に譲ることとする。

１．　調査研究の目的と方法

1.1　研究の目的と領域

日本は古くから川の資源を大切に利用し、文化や伝統を育み、継承してきた。しかし、産業構造の変化、都市化の進行、河川改修による環境の変化などにより、川漁、伝統工芸など川の恵みを活用した生業の継続が困難になり、これらに従事する人々も減少した。

現在、川の生業に携わる人々は少数ながら全国各地で活動しているが、後継者不足などの課題を抱え、人的・技術的継承が困難な状況にある。個人が有する経験、知恵、伝統技術などは、先人から何代も受け継がれた歴史の蓄積である。しかし、これらは公文書や資料として保存されることが少なく、そのため、貴重な知的資源の損失になっている。

知的資源の継承を目的とするとしてもその範囲は広く、また保存の手法も活用方法も確立されたものはない。そのため、本研究では、川にかかわる“生業”に焦点をあて、職人技術者への調査を通して、忘れ去られようとしている技術や文化、歴史の記録保存を行うとともに、その最も適切な記録保存の方法を検証し、そうした知的資源を川・地域・人のつながりの再構築に結び付け、さらにそれらを活用した地域活性化の方策について、いくつかの限られた事例を取り上げて、考察を行うことを目的とするものとする。

1.2　調査方法

調査は以下の手順により進めた。

① 川にかかわる生業（地場産業、伝統工芸、川漁、舟運など）について、資料収集・整理を行う。
② 全国一級河川のうち３水系程度を抽出する。抽出にあたっては、地域情報に精通したNPOより情報の提供・協力を得て行う。
③ 選定した３水系における生業（地場産業、伝統工芸、川漁、舟運など）について、文献調査を実施する。
④ 注目すべき事例や組織、人物を抽出し、ヒアリング調査を実施する。
⑤ 各調査結果を整理した後、社会状況、環境などの要素を重ね合わせ、検証及び分析を行う。これにより、川・地域・人のつながりの再構築、及び川を軸とした地域活性化の方策について考察を行う。

２．研究領域と先行研究

2.1　研究領域の選定

川にかかわる生業の現状について、資料を基に調査を行った。

調査にあたっては、①専業、兼業にかかわらず、特定河川をフィールドに活動がなされているもの、②伝統的な技術を継承しているもの、③地域との連携や繋がりがあるもの、以上、３つの視点から情報収集を行った。

様々な産業について調査を行ったが、例えば、伝統工芸である紙すきは、かつては製造工程の中で河川を利用していたが、現在は地下水などで実施されている。京都府綾部市の黒谷和紙工房においては、現在も黒谷川を利用していることがわかったが、このような例は一部に限られたものであった。

また、友禅染めの最後の行程で行われる友禅流しは、かつて鴨川、犀川、浅野川、隅田川などで行われていたが、現在は地下水での人工河川で行われている。

舟運については、保津川、長良川、球磨川などにおいて、観光を目的とした川下りが行われているが、FRP製の船を使用するのが主流であり、木材を使用した伝統的な川船はほとんど使用されていないことがわかった。

川漁については、河川環境の変化による魚類数の減少、漁業者の減少などから存続が危ぶまれる例もあるが、河川固有の伝統漁法を守りながら地域で活動しており、本調査を実施するにあたり適切な対象であることが明らかになった。

以上の結果、本調査においては「川漁」を中心に調査を進めることにした。

2.2　川漁に関する先行研究

川漁については郷土史、民俗学、生態学などの視点から研究がなされている。

川漁師の生い立ち、伝統漁法、技術習得のノウハウ、生活、川に対する知恵や思想など一代記を記したものとして山崎[1]、野村・蟹江[2]、宮崎・かくま[3]、櫻木[4]の文献があり、川漁について知ることのできる貴重な資料となっている。

様々な川漁師の聞き書きを漁撈研究の基礎資

[1] 山崎武（1993年）：『四万十　川漁師ものがたり』同時代社
[2] 野村春松・蟹江節子（1999年）：『四万十　川がたり』山と渓谷社
[3] 宮崎弥太郎・かくまつとむ（2001年）：『仁淀川漁師秘伝　弥太さん自慢話』小学館
[4] 櫻木敏光（1985年）：『香魚の話－日田の鮎押し－』みずき書房
櫻木敏光（1993年）：『香魚の夜話－日田の鮎押し－』みずき書房

料としてまとめたものとしては、江の川水系漁撈文化研究会編[5]があり、かつての伝統漁法や代々続く川漁の歴史、川船づくりについて複数の漁師の話がまとめられている。

安斎[6]は、多摩川で行われていた100種類程に及ぶ伝統漁法を５つに分類し、漁具や技術的特徴などについて詳細に記録している。

全国各地の川の現場を訪ね、それぞれの漁法を紹介するものとして、立松[7]や斎藤[8]があり、主要河川のみならず支流を含めた川漁師の実態について幅広く知ることができる。

このほか、伊藤[9]は環境民俗学の視点から、川漁師の自然観と環境とのかかわりについて論じている。

このように、川漁について幅広い分野で研究がなされている。しかし、その成果は一部の河川の生業やその技術、伝統文化などの紹介に限定されている。

３．事例調査

3.1　事例調査の視点と方法

事例調査にあたり、全国のNPOキーパーソンに御協力を頂き、地域情報を得た。事例選定にあたっては、以下を重視した。

◆　兼業者であっても川漁への比重が高い川漁師であること
　理由：川にかかわる生業をテーマとしており、個人が有する経験、知恵、伝統技術の記録保存の点で遊漁者では調査対象とならないため

◆　川漁師が率先して、新しい取り組みに挑んでいること
　理由：地域活性化にあたっては革新的な能力の発揮が重要なポイントとなるため、新しい取り組みを実践しているかあるいは実践しようとする人でなければ次の展開が期待できないため

◆　NPOや地域団体等と連携し、何らかの活動を行っていること
　理由：川漁それ自体の衰退傾向からみて、他団体や他産業などとの連携協力がなければ持続可能な生業とはならない可能性があること。また調査対象を選定するにあたり、本調査の目的に照らし必要な要素であるため

3.1.1　伝統漁法に関する全国事例調査の結果概要

事例調査を進めるにあたり、全国主要河川・湖沼における伝統漁法の種類や概要について、文献調査を行った。結果を下記に示す[10]。

3.1.2　調査対象河川の選定

以上の結果、次の３河川を対象に事例調査を実施することにした。選定理由は以下の通りである。

①　四万十川（高知県）
　四万十川というネームブランドを活かし、観光の視点で伝統漁法を伝える取り組みを展開している。

②　球磨川（熊本県）
　川辺川ダム問題に翻弄されながらも地域共有の財産である川を守り、後世に伝えようと活動を展開している。

③　多摩川（東京都）
　都市河川特有の諸問題を抱えながらも、人々が集い・楽しむことができる川になるよう、多摩川を守ることを目的として活動を展開している。

---

[5] 江の川水系漁撈文化研究会（1999年）:『聞き書き　江の川物語』江の川水系漁撈文化研究会
　江の川水系漁撈文化研究会（2000年）:『聞き書き　江の川物語　第２集』江の川水系漁撈文化研究会
[6] 安斎忠雄（1985年）:『多摩川水系における川漁の技法と習俗』財団法人とうきゅう環境浄化財団
[7] 立松和平・大塚高雄（1993年）:『水の旅　川の漁』世界文化社
[8] 斎藤邦明（2005年）:『川漁師　神々しき奥義』講談社
[9] 伊藤廣之（1994年）:「淀川の川漁師からみた自然」『試みとしての環境民俗学―琵琶湖のフィールドから―』雄山閣出版54～73ページ
[10] 立松和平・大塚、前掲書、巻末資料を基に情報を修正、追加したものである。

表２．１　主要河川・湖沼における主な伝統漁法の種類

地域	河川・湖沼名	漁法名称
北海道	石狩川	茅筌（どう）
東北	小川原湖	船曳き、氷下（しが）曳き、腰曳き、袋網、胴網、刺し網、延縄、簀巻き
	馬渕川	投網、友釣り、ガラガラ、延縄、置き鉤
	岩木川	押しまくら、しげだ
	米代川	投網、鵜縄（うなわ）、跳ね網、友釣り
	雄物川	鵜縄
関東	那珂川	投網、叺（かます）網、アイソ堀り、ウナギ筌（うけ）、ぼだ筌、カニ筌、簗、魚堰（うおぜき）、サイたたき、友釣り、置き鉤、延縄、掛け釣り 火振り、ヤス突き
	荒川	投網、瀬張り、簗、ガラ曳き、友釣り、置き鉤、コロガシ、引っ掛け
	多摩川	投網、ツツッポ、ボサ、コロガシ、めがね
	相模川	投網、鵜縄、友釣り、コロガシ、モジリ
北陸	三面川	居繰り網、鵜縄、てんから釣り
	信濃川	流し刺し網、袋網、筒筌、籠筌
	神通川	投網、てんから網、流し網、友釣り、コロコロ釣り
	庄川	投網、てんから網、刺し網、流し網、筒、友釣り、コロコロ釣り
	九頭竜川	脇投げ網、地曳き網、逆筌（さかえば）、吊筌（つりせん）、カニ筌 編戸（あど）、威（おど）し縄、友釣り、コロコロ釣り
中部	千曲川	投網、筌、箱伏せ
	諏訪湖	投網、四つ手網、大四つ手網、きよめ、たけたが、ろうや（出格子） 網筌、流し鉤、シジミかきジョレン、貝かき、つぶひき網（舟）
	天竜川	投網、友釣り、ごろ引き釣り、数珠（じゅず）釣り、捨て鉤釣り
	富士川	大モジリ
	浜名湖	メッコ網、ウナギつぼ、たきや、貝かき、ねこ網
	矢作川	投網、刺し網、張り網、巻き網、モンドリ、簗、ズガニ籠、威し縄 友釣り、ガリ釣り、引っ掛け、捨て鉤釣り、穴釣り
	長良川	投網、トロ流し網、すば網、中猟網、地獄網、ノボリオチ、あじめ簗、 夜網、そじ、鵜飼い、友釣り、ガリ釣り、ジミかきジョレン
近畿	琵琶湖	刺し網、浮き網、投網、四つ手網、たつべ、⊠（えり）、簗、追いさで 延縄、沖すくい網
	由良川	投網、投げ網、地曳き網、カマスカ張り、出置（でおき）網、ウナギ筌、 カニ筌、エビ筌、筒、イサザ落とし網、簗、仕切り網、鵜竿 引っ掛け
	熊野川	投網、四つ手網、火振り、アユ掛け
	紀ノ川	投網、小鷹網、刺し網、さや、友釣り、延縄、段引き
	加古川	竹筒、かけひ
中国	吉井川	投網、刺し網、カニせん、魚堰、ツツッポ、柴漬け、友釣り、アユ掛け、延縄
	旭川	投網、刺し網、ウナギモジ、カニ籠、簗、火振り網、夜投網、友釣り アユ掛け、ちょん掛け
	高梁川	投網、刺し網、カニ筌、かごつけ、魚堰、鵜縄（鵜川）、鵜竿（おいたも）、視水器かけ
	太田川	建網（刺し網）、投網、こごり、にごりかき、ウナギ籠、カニ籠網 ウナギ箱、建網、岩おこし、石ぐろ、水眠、友釣り、コロガシ
	千代川	鵜川
	宍道湖	しばて、刺し網、小袋網、コイフナ網筌、ウナギ筌、ウナギ竹筒 ます網、於朶（おだ）網、朶葉（だば）漬け、延縄、シジミかき
	斐伊川	投網、刺し網、たも網、箱筌、モンドリ、友釣り
	江の川	投網、にごりかき、手先、たいまち、大曳き網、ウナギ籠、切川 建網、鵜縄、付けばり、友釣り、ちょん掛け、ちゃぐり

地域	河川・湖沼名	漁法名称
四国	吉 野 川	投網、投げ網、刺し網、カニモジ、筒
	肱　　川	投網、投げ網、コイ網、カニ籠、じんどう、カニ網、瀬張り 貝がら曳き、板ぜり、足ぶみ、鵜飼い、あさり
	仁 淀 川	投網、投げ網、筒、カニ籠、火振り、瀬張り、ガラ曳き、石ぐろ 延縄、友釣り
	四万十川	投網、地曳き網、筒コロバシ、箱コロバシ、カニ籠、ノボリオトシ筌 シラス、しめ縄、火振り、ガラ曳き、イタチ、柴漬け、石ぐろ 延縄、数珠（じゅず）釣り、川海苔
九州	筑 後 川	投網、目刺し網、筌、簗、火振り、鵜飼い、友釣り、延縄、すやがし アイ押し、流し網
	大 野 川	投網、投げ網、刺し網、七五三縄（しめなわ）
	五ヶ瀬川	投網、ウナギ筌、簗、友釣り、瀬付き釣り、延縄
	球 磨 川	投網、刺し網、ウナギ籠塚、友釣り、がっくり掛け、ばくだん釣り 延縄

3.1.3　調査の方法

調査方法としては文献調査のほか、ヒアリング調査を実施した。川漁師、郷土史研究家などを対象に、各河川２～３名から活動の内容、川漁の現状、河川の状況、環境の変化、問題点・課題、川に対する哲学・思想などについて聞き取りを行った。

これらを通して、①伝統漁法の技術習得に至る要素、②川漁を軸とした新たな取り組みの要素について検証した。

なお、本稿では、紙幅の関係上、四万十川の調査結果を報告することとし、他の事例調査とその比較研究の結果については、別稿に譲ることとする。

3.2　四万十川

3.2.1　四万十川の伝統漁法

四万十川での代表的な伝統漁法の概要及びそれを表にしたものを以下に示す[11]。

◆　ガラビキ漁

３～４月のゴリが遡上し始めた頃、サザエの貝殻を 300kg ほど付けたロープの両端を２人で持ち、上から引きずってサザエの光と音でゴリを脅し、下にしかけた四つ手網にゴリを追い込む漁。

写真３.１　四万十川の状況

◆　柴漬け漁

下流から汽水域で８月～ 10 月に水が出た時、下りウナギを捕る漁。椎やヤマモモの枝の束で作った柴を潮境に沈めておき、ウナギやエビが入った柴をスクイタマで上げる。

◆　コロバシ漁

餌を入れた仕掛けを水中に浸け、ウナギを誘導して捕獲するウエ（筌）漁の一種。餌はミミズが主だが大型のウナギにはアユやハヤ・エビを用いる。

[11] 高知県林業振興・環境部 HP を参照（2012.3.30 アクセス）
[http://www.pref.kochi.lg.jp/~shimanto/1_2guide_kurasi/gyohou.html]

◆　火振り漁

フチオキ網ともいう。数張りから十数張りもの建網を淵や瀞に仕掛け、月のない暗夜に火を振ってアユをおどし網に誘い込む漁。大量にとれるため免許を持つ一部の漁業者のみに許されており、上流域では漁区も限られている。漁期は７月～ 10 月 15 日と 11 月 15 日から年末であるが、禁漁前の１ヵ月と解禁からの１週間が勝負といわれている。火光には松明や電球を用い、川面に火が揺れるさまは四万十川の風物詩ともなっている。

◆　友掛け漁及びその他の釣り漁

漁期５月 15 日から 10 月 15 日までの昼の漁。竿につけたオトリアユを川のアユの縄張に誘いのために入り込ませ、なわばりに侵入した他の魚を追い払うアユの習性を利用してかけ針にかける、アユ漁としては最も一般的な漁。

表３. １　四万十川における伝統漁法

魚種	区分	漁法	漁具	漁期（月）	備考
アマゴ	釣	アメゴ釣り	釣竿	6 ～ 7	上流域
		トバシ漁	毛針	4 ～ 7	上流域
	その他	筌	筌	10 ～ 11	上流域
		カナツキ	カナツキ	6 ～ 7	上流域
ウグイ	釣	イダの釣り	釣竿	3 中～ 4 中	
	網	タチイダ	投網	3 中～ 4 中	
		イタチ漁	網・イタチの皮	12 中～ 2	上流域
	その他	イダブシ	イダブシ	10 ～ 11	
カワムツ オイカワ	釣	ハヤツリ	釣竿	5 中～ 8	
	その他	ワリコ	ワリコ	5 中～ 8	
		ハヤジゴク	ハヤジゴク	5 中～ 8	
アユ	釣	アユの釣り	釣竿	6 ～ 8	
		友掛け	釣竿	5 中～ 10 中	
		ゴンブリ	釣竿	8 ～ 10 中、11 中～ 12	
		シャクリ	釣竿	8 ～ 10 中	
	網	投網	投網	6 中～ 10 中、11 中～ 12	
		マワシウチ	投網	6 中～ 10 中、11 中～ 12	下流域
		投げ網	投げ網	7 中～ 10 中、11 中～ 12	
		注連縄（瀬張り）	注連縄・建網投げ網	9 ～ 10 中、11 中～ 12	
		地曳網	地曳網	9 中～ 10 中	下流域
		張り網	張り網・水中眼鏡・カナツキ	7 中～ 10 中、11 中～ 12	
		にごりすくい	網	8	下流域
		火振り漁	建網・イサリ等（火光）	7 ～ 10 中、11 中～ 1	
	その他	アイニギリ		8 ～ 9	禁止
		ヤナ	ヤナ	8 ～ 10 中、11 中～ 12	禁止
		鵜飼	鵜縄など	6 ～ 10 中、11 中～ 12	禁止
コイ	網	寒鯉漁	カナツキ・網	10 ～ 3	
	その他	カブセヅキ	カナツキ	6 ～ 9	
ウナギ	釣	ハエナワ	ハエナワ	4 ～ 11	
		スズクリ	スズクリ	4 中～ 5、8	
		ヒゴ釣り	ヒゴ釣り	7 中	
	網	柴漬け	スクイタマ・柴	3 中～ 11	下流・汽水域
		石グロ	網・石	4 ～ 12	下流・汽水域
	その他	コロバシ	コロバシ	5 ～ 10	
		ウバサミ	ウバサミ	6 ～ 9	

魚種	区分	漁法	漁具	漁期（月）	備考
ゴリ（ヌマチチブ）	網	ガラビキ	ガラビキ・四つ手網	3～4	下流域
	その他	ブッタイ	ブッタイ・笹束	5～8	
		のぼり落とし	ゴリウエ・立て簀	3～5	
エビ	網	エビタマ	エビタマ	6～9	
	その他	水中銃	水中銃	7中～8	
		エビツツ	エビツツ	6～9中	
		エビスクイ	ソウケ	4～6	
アオノリ	その他	アオノリ漁	アオノリカキ	10中～2、5中	下流・汽水域
モクズガニ（ツガニ）	釣	カニ釣り	カニ釣り	9	増水時
	その他	カニジゴク	カニジゴク	9中～10	
クロダイ（チヌ）	釣	餌釣	釣竿	9～2	
	その他	チヌカゴ	チヌカゴ	5～9	汽水域

なお、アユの釣り漁としては６月から８月の餌釣り、餌なしのかけ釣りのジャビキ、錘が川底を転がる音に驚くアユを掛けるゴンブリなどがある。

◆　アユの網漁

代表的な網漁として、川に張った縄に脅え川縁に寄ってくるところに投網を打つ注連縄、20ｍほどの網を投げ込んだ後竹竿で水面を叩き網に追い込むタタキ網、出水時に河岸に身を寄せるアユをすくうニゴリクミ、網を張りわたした川底のすき間に筒を仕掛けるセバリ、網を張り渡し朝になって引き上げる建網、アユの群れに打つ投網や投げ網、20～30隻の船から投網を次々と打つマワシウチ、産卵のために下ってくるアユの群れを囲み河原へ引き上げる地曳網などがある。

3.2.2　ヒアリング調査結果

四万十川では川漁師２名のほか、現地調査を通じて機会を得た元船大工１名、合計３名から聞き取りを実施することができた。結果概要を整理する。

四万十川№1　A氏（川漁師・山漁師／民宿経営）

◆取材対象者について

・川漁師のほか山漁師としても活動する傍ら、平成17年より宿泊客に川遊び体験メニューを提供する民宿を経営。この他、建具屋も営む。

・川漁師体験では、ウナギ、アユをメインに魚取りを行っている。四万十町で川漁体験ができるのはここだけで、確実に捕獲できるという評判からメディアの取材も多い。

◆川漁の現状

・この地域では火振り漁が代表的な伝統漁法である。コロバシ漁は６月、延縄漁は５月終わりから行う。

・この付近の川漁師は４～５人。漁で生計を立てているのはA氏のみ。多くの組合員は趣味の延長で漁を行っている。

・火振り漁だけは組合員であっても世襲の習わしがあり、権利を持っていないと漁ができない。場所も暗黙の了解で縄張りが決まっている。「ここは誰の場所」と決まっているので、それを侵さないようにやっている。漁業者が辞めるとき、火振り漁の権利を引き継ぐ形で購入する。家の前で漁ができたら良いが、A氏の持ち場は民宿から２～３キロ上流付近のため、その都度車で移動している。どの場所でも漁ができるわけではない。

・火振り漁は、観光用には伝統的に松明を使って行うが、通常は一人でも漁ができるように投光機と発電機を船に積んで電気で行っている。

・火振り漁でなければ出荷するほど大量のアユは捕れない。投げ網漁でもとれるが、投げ網は技術がないと捕れない。ある程度の年数や経験がないと難しい。魚の全体量が

減ってきているので、捕れる量も減っている。
・所属先の四万十川上流淡水漁業協同組合にアユを卸す。組合へ卸し、築地市場へ出る頃には10倍の価格になる。その他、宿泊したお客さんには注文があれば送っている（アユのみならず、キノコなども）。
・組合員の中でも一番鮮度が良いアユを出荷している。冷蔵庫で作った氷ではなく、雪のようにアユにぴったりフィットするシャーベット状にした氷にアユを落とすと鮮度が落ちない。鮮度でも商品価値が違う。このように工夫する漁師はいなくなった。
・以前は杉板の木船を使用していたが、今はアルミ船を使用している。昔はこの地域にも船大工がいたが、今はいない。自分で川船を作ったこともあるが、注文もなく、船の製材もしていないのが現状。
・漁の技術については、子どもの頃は親や大人に教わったが、どのようにすれば捕れるか、ウナギや魚の習性・ポイントの選び方などは自分で研究した。詳しく教えてくれる人はいなかった。自分で創意工夫しながら、コロバシも自分で作り改良を重ねてきた。技術や漁具は進歩したが、漁獲量は減ってきた。
・漁だけで生活ができないのが現実。希望者がいて携わってもアユやウナギが捕れるようになるには年数がかかる。好きで、センスがあり、運動神経がある、という条件がそろっても、技術習得だけでも少なくとも10年はかかる。それでもものになるかどうかはわからない。

◆河川の状況、環境の変化
・昔と比較すると10分の1程度魚が減っている。15～20年前まではアユが取れ放題だった。減少の要因としては、温暖化・気候の変化、川の汚染、漁法の改良（道具が良くなってきた）などがあげられる。戦後の植林で水量が減り、人工林が増えて水質も悪くなり川のミネラルが減り、雨が降ると水が濁る、という自然のサイクルが乱れてきたことだと思う。

◆問題点・課題
・ウナギの稚魚が高騰している。それは結局、産卵する親ウナギも減ることになるため、養殖自体が首を絞めている。戦前までは養殖で販売することはなかったが、シラスウナギをとるようになり天然ウナギが減った。天然ウナギが子どもを産まないことには親で帰ってこない。完全養殖なら良いが、天然ウナギの稚魚を養殖にまわすようなことをすれば当たり前のこと。養殖で稚魚を孵す実験も成功したようだが、供給までには至っていない。
・後継者がいない。希望者がいれば川漁師見習いも募集したいと観光協会などに相談している。
・技術を引き継ぐ人を作っていきたい。投げ網やコロバシなどを教えた人もいたが、家族が食べるだけの量が捕れるようになると、そこで満足してしまう。もう少し追求してほしい。捕れた魚を出荷して、都会に送れるくらいになってほしいが、そこまで至らない。川漁師は副業であるが、中流では私が最後の川漁師だと思う。
・川漁体験は夏期に集中してしまう。1日1組で対応しているため、予約を断らなければならない状況も多々ある。

◆川に対する思想・哲学
・「漁のセンス」とは、自然の中での微妙な感覚である。季節の感覚や匂い、例えば、少し暖かい風を感じるとアユが来るな、という感覚などがわかってくるまでには20～30年かかる。にわかの知識では難しい。音のざわめきなど感じるものが体にあるかどうかであり「この風がきた、アユがでるな」というようなもの。長い経験を経て身につける自分の感覚である。
・秋口、西風が吹いたら落ちアユが下がるサイン。西風が吹くと雨が降ることをアユも知っている。淵の深い場所にいるのが浅瀬に向かって動く時、アユが捕れる。このような習性を全て把握していなければならない。「アユは今どんな考えをしているのか」「ウナギは今どんな考えをしているのか」と。相手を攻略するには「相手を知る」が何よりも重要。

四万十川№２　Ｂ氏（元船大工）

◆取材対象者について

・祖父の代から四万十川で船大工として活躍してきた。３代目であるが後継者はいない。

◆船大工、川船の現状

・川船ならば何でも作っていた。今の FRP 船は曲線になっているが、昔の川船は平底であった。見事な細工で釘の頭などは見えず、全部入れ込みで芸術品のようであった。
・船以外には風呂桶をよく作った。船大工は水を漏れないようにする技術があるため、作ることが可能であった。
・四万十川にはもう船大工はいない。全国的にも木造の川船は無くなってきている。長野の千曲川に１軒あると聞いている。
・船大工で生計が成り立てば良いが、現実的には難しい。今は手入れも簡単なプラスチック製の船が好まれている。「作って下さい」という人も何人かいる。しかし、材料はあるが作成には至っていない。
・高知県立歴史民族資料館に頼まれて、木製の川船を作った。常設展示ではなく企画展において展示すると言っていた。船を作る際、最初から写真に撮っており、その記録があるはず。
・船の技術については、「稲城市の民俗（四）～多摩川中流域の川船～」（稲城市教育委員会、平成３年）に詳しくまとめたものがある。
・甲南大学文学部歴史文化学科の出口晶子先生が川船をテーマに研究しており、著書も多い。何度もヒアリング調査に来ている。

◆河川の状況、環境の変化

・終戦の翌年、昭和 21 年頃から４年位、四万十川流域では天然木が伐採された。今は良い山が残っていない。伐採の次は、河川敷での砂利採取が始まった。
・かつては魚、シジミ、アオノリが豊富に捕れた。アオノリは今年、特に採れていないようだ。ただ、採れたとしても昔のように美味しくないと感じている。
・昔はサラサラときれいな､川へ行ったら清々しい気分になるような匂いがあった。今は全然ない。

四万十川№３　Ｃ氏（川漁師 / 株式会社川漁師倶楽部）

◆取材対象者について

・四万十出身で子どもの頃から漁に親しむ。若い頃は別の仕事に就いていたが、平成 10 年にＵターンで戻る。その後、漁師になるほか、河口域の観光施設で団体客を対象とした川漁師体験のインストラクターとして活動。
・一度、地元を離れたこともあり、改めて四万十川の魅力を確認。この資源をもっと有効に活用しようと、斬新な取り組みを行っている。

◆活動の内容

・任意団体として発足し、2007 年に「株式会社川漁師倶楽部」を設立。株式会社にしたのは、大手旅行代理店と仕事をする際、会社組織でなければ契約面で大変だったため。四国運輸局の運送許可ほか様々な許可を個人で取得していたことから NPO へ移行する手続きも難しく、任意もしくは会社方式ということで始めた。
・当初は 20 人のメンバーがいた。次第に分裂し、現在は４～５名である。ほとんどは四万十川下流漁業協同組合に所属の漁師で、投網、柴漬け漁、延縄など行っている。
・組合に加入し、漁業権さえあれば漁はできるが、お金にならなければ従事する人はいない。そのため、どんどん若い人が減り、後継者を育てていくのも難しくなっていた。そこで、“観光”に着目した。魚は少ししか捕れなくても外の人が来れば、大きな影響がある。魚を売って糧にはならなくても、観光で乗船料が発生すれば日当も出てくる。見る観光から、体験型観光へ、団体ツアーから個人旅行へとどんどん変わっていたこともあり、組織を立ち上げた。
・農業体験、川の漁師体験など、地元の人から見ると何もなくても、都会の人にとっては異空間であり、エビを捕りその場で七輪

で焼いて食べるだけでも喜ぶ。少し目線を変えて観光に持っていっただけである。例えば、エビが20匹位しかいなければ漁師はお金にならないから漁はしない。しかし、他所から来た人は、自分が実際に網を入れて魚とりをしたいと思っている。投網であっても下手は下手なりに、網が開かなくても投網体験ができる。目的は何にせよ、そうすれば後継者も伝統漁法も存続することができると考えた。

・設立して約３年間はお客さんが来なかった。他の漁業者に「今日もお客さんはいないのか」などと馬鹿にされ、その繰り返しだった。ホームページもない、何もないところからスタートしたので大変苦労をした。今でこそホームページもありホテルと提携もしているが、最初はそのようなものだと思う。

・昨年は夏休みの時期、100組ほどのお客様が訪れるようになった。しかし、夏休みに希望が集中してしまうため、お断りしなければならないことが多々ある。

・団体客ではなく、他の家族を気にしないで楽しむことができるように個人客を対象にしている。ほとんどは家族連れ。幼稚園から小学校低学年の子供連れの家族４人が多い。100%県外の人で、東京、埼玉、横浜など関東地方の人が当初は多かった。関東のローカルテレビ局で紹介され、次第に全国局のテレビでも放送されるようになり、雑誌からも取材を受けたことで、全国から来てくれるようになった。

・私も柴漬け漁、投網は先輩から教わった。習う時というのは、道具も何もない。習いながら、コツコツ道具を作っていった。投網なども一度覚えこんでしまったら絶対忘れない。覚え込むまでに３ヶ月や半年かかるのだから、次に伝えるためにはこの方法しかないと思った。若い人が来た時、その子にきちんとしたお金が払えるようになっていれば、若者も来る。

・メンバーは、お客さんと一緒にするのが楽しいと言ってくれる。お客さんが喜ぶ顔、ニコニコしている顔を見たら、体力的にきついけど止めてはいけないと思う。リピーターも多く、毎年来るたびに子どもが大きくなっている。成長していくのがわかる。引きこもりだった家族や自閉症の子、ダウン症の子どもも来る。

・今、一番若いメンバーは25歳。彼は夏休み中、違う所で自分の商売をしている。私の真似をして体験活動をしている。そのように増えていくことは良いことだと思う。それしか、漁が残っていく方法はないのではないかと思う。漁獲が減っていくから、付加価値を付けるしかない。

◆川漁の現状

・２月はアオノリ、アオサの漁期を迎えているが、漁獲量は減っている。ここ３年位は特に落ち込んでいる。シラスウナギも激減。生活できないため、漁師の数も減っている。四万十川下流漁業協同組合の組合員は495名。アオノリ漁などしている人は100人位と思う。下流に専業者はいない。

・下流はアオノリ、アオサがメインで、一番採れた時で年間３億円、30t位アオノリが採れた。アオノリは一種漁業権。通常皆さんに認知されているのは五種漁業権で、魚の漁をメインとしている。下流組合自体は一種漁業権がメインのため、五種漁業権にはあまりタッチしていない。

・アオノリもアオサも今年（2012年）は最悪。アオノリは明後日入札するが、たった350kgしかない。一番採れた時で年間30t、次第に落ち込み４年位前から10t、それから１tに落ちてどんどん減っている。一番のピークが３月の彼岸時期であり、昨年はまだ良かったが今年は不漁である。

・この地域の漁師は半農半漁が多い。米作りをしてオフになると、アオノリ、シラスウナギを捕り、その合間に柴漬け漁で魚を捕るなどしている。専業で川漁師をされている方は今でもいるが、数は激減している。川漁師だけでは生計が成り立たないのが現状である。

・四万十川は縦に長いため、下流と上流では漁の方法も違う。例えば、ウナギを捕る石ぐろ漁では、汽水域の干満を利用している。干潮に作って干潮に揚げる中で、潮が動いて沈んだり浮いたりする中でウナギが動いて中に入る。上流に行くと潮の干満がない

ため、作っておいてもそのままである。一潮 15 日間。大潮の干潮に作って、大潮の干潮に揚げる。下流の漁の形態を他に持っていっても何の意味もない。柴漬け漁も同じ。四万十川では網のかけ方もみんな違う。

・投網も私達も自分で作るが、今は道具がすごく良くなっている。逆に言えば、少ない魚に対してものすごく道具が進化している。

・柴漬けなら柴漬けの作り方、ベースを作って周りに巻いていく、そのベースの作り方自体が技術である。投網は投げるまでが技術。道具は自分が作るものだから、それを技術と言えば技術であるが、網地だけ買ってきて後は自分ですいていく。自分の体型、力に合わせて、全部オリジナルで作っている。

・漁法や技術を書いた本はない。漁師の頭の中にあり、口頭で伝えていく。例えば、石ぐろ漁でも簡単な図解や説明書はあるが、本当の技術は現場で習う。ただ単に河床を掘れば良いのではなく、掘って掘り切ってしまうと中で水が滞留してしまうのでよくない。下の水が澄まないといけないのだが、掘り切ってしまうと中にゴミが溜まってしまう。それを 15 日間置いてしまうと魚がいなくなる。石ぐろを積み上げた中でも水が戻っていかないと、つまり中が綺麗でないとウナギは棲めない。この漁法について、水が溜まる、ゴミが腐ってしまうなど、そのようなことを書いているものはない。

・感覚的にこれをこうやったらこうなるという理屈は言わない。「これに困ったから、これをどうしたら良いですか」と聞かれたら、「ここをこうしてああして」という形で教えていく。「バカだね～」などと言われながら、一つ一つ積み上げていくものである。文書化して紙で残してもおそらくダメである。

・漁師は捕るだけであるため、それを如何にして高く売っていくかの視点もこれからは必要になる。商品化して売った時、「綺麗だね、すごいね」と相手が思わない限り、高い値段を出して買わない。100kg、200kg 捕ったとしても、それを売って初めてお金になるわけであるから、如何にどうするかを考えなければならない。捕れなくなってきているものを如何に高く売るか、ということを考えていかなければならない。

・アオノリもただ捕るだけではなく、袋に詰めて自分達で売る、商品化する、そこまで考えていかなければ残れない時代にきていると思う。１kg ９千円のものを業者が売る時には１万５千円になっている。それならば、自分たちで袋詰めして売れば１年中の糧になるかもしれない。100kg、200kg も捕れないのだったら、もっと値段を何倍にもしていこうという考えでいかなければならない。それを今の若い人にも言っている。良いものを捕り良い商品にして出せば、それだけの価値がある。四万十川というネームバリューもあるため、自分達はそこまで入ろうと思っている。

◆問題点・課題

・同じ漁師でも色々な考え方を持っており、温度差がある。四万十川の体験型観光が伸びないのはそこに原因がある。たくさんの伝統漁法を残していかないと過去のものになってしまう。自分もいつまでもできるわけではないため、技術を誰かに渡していかなければならない。

・近年の不漁は、河口の砂州で工事をした影響が大きい。

・昭和 30 ～ 40 年頃は、投網を１回打って軽四輪の中古買った人もいる。それだけ魚がいたが、今では考えられない。昔のことを言っても元には戻らない。シラスウナギもどんどん捕れて、道具が良くなり根こそぎ捕ってしまい、それを繰り返しているうちに激減した。ここまでこないとわからない。

・漁師倶楽部を始める６年位前には、冬シーズンにお金に困ることはなかった。昔は冬場が漁師の収入時期だったが、今は夏、体験型を含めて夏の方が大きい。

◆他の取り組み

・ほとんどのお客さんは体験が終わると、次どこに行ったら良いですかと聞く。漁師体験が一番の目的で来ているから、ご飯を食べる所も決めてない。それならば最初からメニューを作り提携したら良いのではということで、去年、「NPO 高知おひろめプロ

ジェクト」を立ち上げた。

・これは、四万十市のみならず高知県内の12人で発足。高知県全体で一つのものとして、みんなで考えていく中で四万十川の観光にも注目が集まった。メンバーは観光に従事する人だけではなく、イベント企画会社やITなどの経営者なども加入している。

・はじめはお客様に紹介もしていたが、手間賃、紹介料、斡旋料で困っていた。なぜなら、事務的手続きをとっているから経費がかかる。FAXを流す、電話をする…全部自分の所で経費を払わなければならない。紹介業者に手数料を取ってくれと言われても、取り決めがなければ取れない。お互いに義理で持つのはやめ、ビジネスの一環で窓口を一つにして皆で紹介してキックバックすれば繋がりも出てくるため、新しい試みを始めた。

写真３．２　柴漬け漁の状況

写真３．３　アオノリの天日干しの状況

・発足したばかりで、具体的な運用はこれから実施していく。

４　四万十川調査のまとめ

4.1　ヒアリング調査の結果

ヒアリング調査の結果から抽出されたキーワード、引き出された要素を以下に示す。

4.2　調査結果の含意

四万十川の事例調査結果から、いくつかの知見が得られた。特に伝統療法の技術習得については、それ自体が記録が難しい部分を多く含む性質のものであること、そのための新たな手法を検討しなければならないことが明らかになった。また、減少傾向にある川漁に関しては、観光や関連分野のネットワーク化など新たな組織や体制の構築による活性化が試みられていた。以下に、その詳細を記しておく。

①　伝統漁法の技術習得に至る要素

本調査では、伝統技術の記録保存も目的の一つとして調査を実施した。しかし、A氏が「好きで、センスがあり、運動神経がある、という条件がそろっても技術習得だけでも少なくとも10年かかる。その上で、センスが磨かれるまでは20～30年を要する」と言われたように、長い経験の中で培われてきた漁法技術を一度のヒアリング調査で理解し、まとめるのは困難であることを痛感した。

また、C氏が「下流の漁の形態を中流に持っていっても何の意味もない。四万十川では網のかけ方もみんな違う」と話したように、同じ河川においても場所により漁法が違うほか、漁師個人の身体特性（背の高さ、手の大きさ、運動神経、体力、年齢など）により創意工夫がなされているため、系統立てて整理しえないものであることも明らかになった。

川船は一定条件のもとで、図面などを用いながら記録することが可能であり、B氏のヒアリングでも類似の参考文献が提示さ

表３.２　四万十川ヒアリング調査結果

対象者	A 氏	B 氏	C 氏
活動	川漁体験メニューの提供		川漁師倶楽部の運営
川漁	漁法・漁具など自ら研究 漁獲量減少		漁法・漁具はオリジナル 漁法記録の保存は困難 冬季間の不漁が顕著
課題	後継者がいない	後継者がいない	漁師間の意識の温度差
哲学思想	漁にはセンスが必要		伝統漁法と後継者の継承
その他		川船の記録がある	新たな組織との連携

れた。しかし、川漁の道具に関してはその漁師のオリジナリティに強く影響されることから、調査計画段階から様々な検討が必要であることがわかった。

いずれにしても伝承技術の保存のためには、「人」を通じて継承・保存することがまず必要であるとともに、長期的で体系的な記録手法による保存の方法を確立する必要がある。

②　川漁を軸とした新たな取り組みの要素

日本最後の清流と言われ、“四万十川ブランド”のイメージが定着しつつある四万十川においても、近年の川漁をめぐる状況は、河川環境の変化に伴う漁獲量の激減⇒川漁師の減少⇒後継者不足⇒伝統漁法の衰退と、負のサイクルにある状況であった。

それを改善すべく、全国でも例のない新たな取り組みが実践されていた。

川漁師倶楽部は、漁業組合に所属する川漁師が自ら、これまで培った伝統漁法の技術を披露し、指導し、お客様にサービスを提供する活動である。「目的は何にせよ、観光でお客さんを呼び漁師として生計が成り立てば、後継者も伝統漁法も存続することができる」と、発想を転換した。この視点はC氏が前職で全国各地を訪れ、あらゆる地域資源にふれた経験を得てからUターンで地元に戻った、というバックボーンが影響しているものと思われるが、目先の利益のみに囚われず「四万十川の伝統漁法を残す、後継者を育成する」という強い思いが結びついた結果であろう。

運営が軌道にのるまで約３年かかっているが、今では多くの人が訪れるようになっている。夏季だけに集中する事業をどのように安定させていくかは今後の課題になるが、これについてはより多くの川漁師と協力体制を構築することにより、発展が可能になるのではないかと考える。高知県全体の観光を繋ぐNPOでの活動も始まりつつあり、更なる発展に期待するところである。

“観光”という視点では、民宿経営に川漁体験を取り入れ、川での楽しみを提供する活動も行われていた。「中流では最後の川漁師」とA氏が自ら語っていたように、ここでも伝統漁法の衰退と後継者不足が課題となっていた。A氏は漁師希望者がいれば育成したい、という気持ちを持っているが、解決策には至っていない。

これについては、下流で活動している川漁師倶楽部と上（中）下流連携することにより、新たな展開が期待できるだろう。河川形態に応じた様々な漁法の違いを知ることで、伝統漁法への興味がさらに深まるのではないかと思われる。

四万十川での取り組みは、川漁を軸とする新たな試みの方向を示す、貴重な事例であった。

（注記　本稿は、平成23年度河川整備基金助成事業「川にかかわる職人技術の伝承記録に見る川・地域・人の再構築と地域活性化に関する研究」（代表　同志社大学大学院総合政策科学研究科･新川達郎　助成番号:23-1216-006）によって実施された調査研究の成果の一部に加筆修正を加えたものである。いうまでもなく本稿の記

述内容については、一義的に執筆者の責任による。）

参考文献

天野勝則（1996 年）:『川漁師の語り　アユと江の川』中国新聞社
安斎忠雄（1985 年）:『多摩川水系における川漁の技法と習俗』財団法人とうきゅう環境浄化財団
飯島伸子（2000 年）:『環境問題の社会史』有斐閣
伊藤廣之（1994 年）:「淀川の川漁師からみた自然」『試みとしての環境民俗学―琵琶湖のフィールドから―』雄山閣出版 54 ～ 73 ページ
井上真、宮内泰介編（2001 年）:『コモンズの社会学　森・川・海の資源共同管理を考える』新曜社
大崎正治（1986 年）:『水と人間の共生―その思想と生活空間―』農山漁村文化協会
嘉田由紀子（2001 年）:『水辺ぐらしの環境学―琵琶湖と世界の湖から―』昭和堂
熊本日日新聞社編集局（1987 年）:『新・球磨学』熊本日日新聞社
江の川水系漁撈文化研究会（1999 年）:『聞き書き　江の川物語』江の川水系漁撈文化研究会
江の川水系漁撈文化研究会（2000 年）:『聞き書き　江の川物語　第２集』江の川水系漁撈文化研究会
斎藤邦明（2005 年）:『川漁師　神々しき奥義』講談社
櫻木敏光（1985 年）:『香魚の話―日田の鮎押し―』みずき書房
櫻木敏光（1993 年）:『香魚の夜話―日田の鮎押し―』みずき書房
笹川耕太郎（2001 年）:『多摩川における川漁業のあゆみと遊魚（釣等）』財団法人とうきゅう環境浄化財団（研究助成・一般研究 VOL.22-No.124）
山川海幸雨（1994 年）:『四万十川だより　沈下橋から』南の風社
菅　豊（2006 年）:『川は誰のものか　人と環境の民俗学』吉川弘文館
立松和平・大塚高雄（1993 年）:『水の旅　川の漁』世界文化社
多摩川誌編集委員会（1986 年）:『多摩川誌』河川環境管理財団
玉城哲（1981 年）:『水紀行』日本経済評論社
鳥越皓之編（1994 年）:『試みとしての環境民俗学―琵琶湖のフィールドから―』雄山閣出版
鳥越皓之、嘉田由紀子編（1984 年）:『水と人の環境史　琵琶湖報告書』御茶の水書房
野村春松・蟹江節子（1999 年）:『四万十川がたり』山と渓谷社
前山光則（1997 年）:『球磨川物語』葦書房
宮崎弥太郎・かくまつとむ（2001 年）:『仁淀川漁師秘伝　弥太さん自慢話』小学館
麦島　勝（2002 年）:『川の記憶－球磨川の 50 年』葦書房
山崎武（1993 年）:『四万十川漁師ものがたり』同時代社
山道省三（2001 年）:『多摩川をモデルとした「河川環境」の保全に関する住民参加の手法、制度についての調査・研究』財団法人とうきゅう環境浄化財団（研究助成・一般研究 VOL.22-No.119）